幼馴染はオレのモノ
DOJIN
R18
成人向け

セフレの幼馴染が
関係解消を求めてきたので
強制中出しキメてやった
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

セフレの幼馴染が関係解消を求めてきたので強制中出しキメてやった

彼女の名前は西野唯。
俺の幼馴染で付き合ってはいないが男女関係はある、
いわゆるセフレというやつである。
というか、恋人といってもいいかもしれない。
告白はしてないが、今更言葉にするのも変だしな。
ぱむっ
んちゅ

「んっ、んン……んちゅう」
「ああ、堪んねー。本当フェラ上手くなったよなぁ」
俺のどこをどう舐めれば気持ちいいのか理解している。
そういう風に仕込んだのだから、当たり前だ。
ちゅぷ
ぢゅるるっ

「あー、やべ。あっ、イク！
口に射精すぞ！」
「んちゅ、ずちゅ、ンふぅ……」
「うっ……！」
ズビュルルッ

「はぁ、はぁ……んっ、はぁ……」
「ふぅ、まずは一発。ゴムつけるから
それティッシュで拭いていいぞ」
「……」
ハァ
ふ。
ボタタ

「さて、じゃあ続けてもう一発っと」
ゴムを着けた俺は、そのまま唯の濡れたオマンコへとあてがった。
「……んン！」
ズニッ

「よっと……」
「んっ、んはぁ、んン……！」
あー、オマンコあったけー。
「おっ、おっ……」
ズッ
ズッ
ズッ

「あーやべ。唯のオマンコ何度ヤっても気持ちよすぎ」
「あっ、はぁ、んはぁ……！」
「全然我慢できねーわ。もうイクぞ？」
「きて、おちんちんイってぇ！」
ズプ
ズッ
ズプ
ハァ
ハァ

「うっ……」
尿道の奥から熱いものがこみ上げ、出て行くのがわかる。
「あっ……」
たっぷりと出切ったところで、俺は唯のオマンコから
それを抜いた。
ビュビュッ

「はぁ、はぁ、はぁ……」
「ふう、気持ちよかった。お前も気持ちよかったろ、唯？」
「……」
ズル

「どうした？」
何事か考えてる唯だったが、やがて意を決したように
彼女は口を開いた。

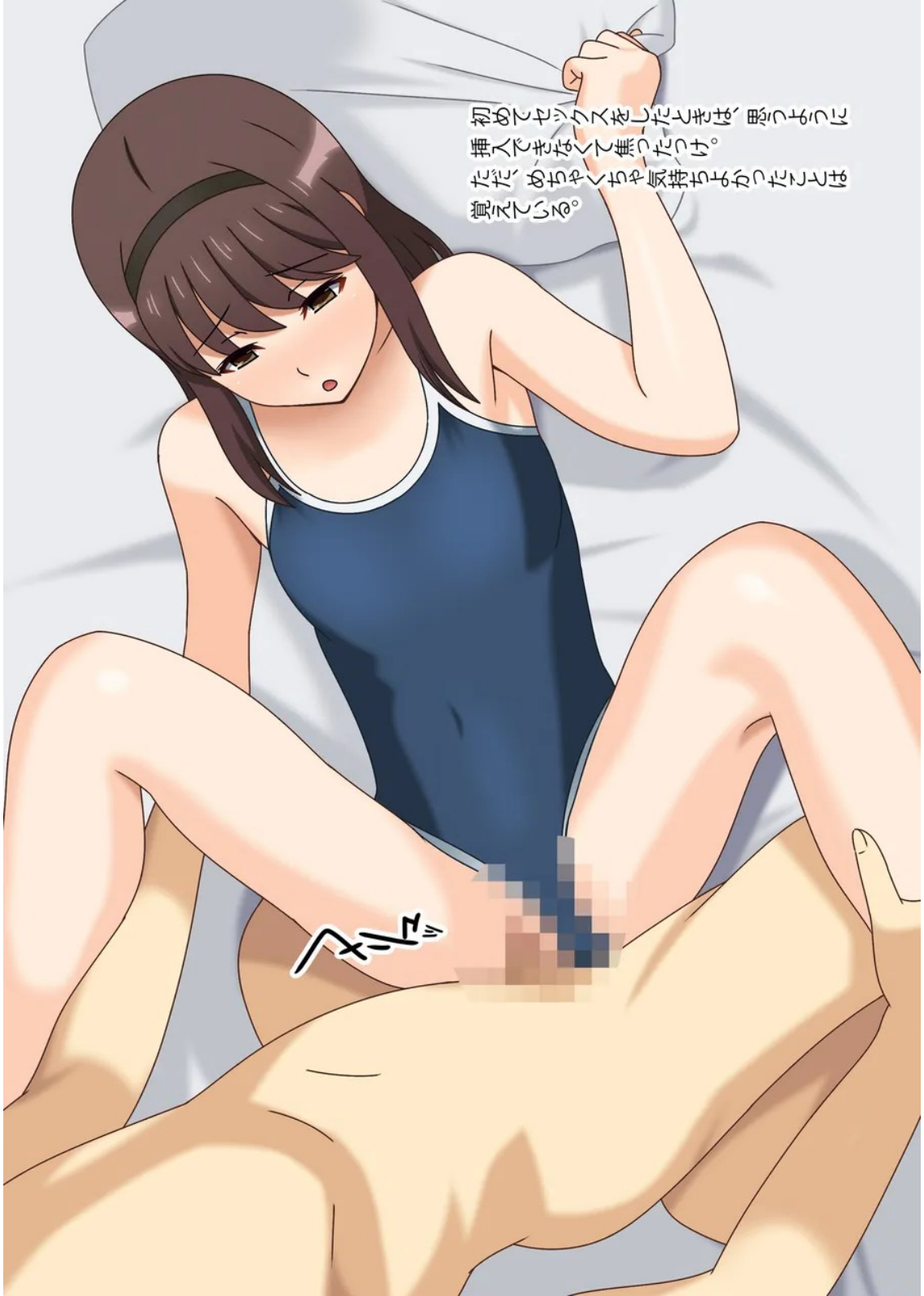
「あ、あのね。その……もうこの関係を終わらせたいんだけど」
「えっ……この関係って？」
「そのセックスフレンド的な……」
ああ、これからはちゃんとした恋人としてってことか。
ちゃんと言葉にしろと。多少恥ずかしくはあったが、俺は口を開く。

「唯、俺……」
「私ね、彼氏ができたの」
「はっ？」
彼氏……って、俺じゃなくて？

……幼い頃からずっと側にいた。
キュッ

ある日保険の授業で性行為について学ぶことがあり、
お互いに好奇心からやってみようという話になった。

最初から裸を見せるのは恥ずかしいということで、
スクール水着を着てきた彼女が印象的だった。
ここから俺の水着フェチは始まったんだろう。


初めてセックスをしたときは、思うように
挿入できなくて焦ったっけ。
ただ、めちゃくちゃ気持ちよかったことは
覚えている。
ヘンレッ

唯も最初は痛がってたが、何回か繰り返すうちにだんだん気持ちよくなってきたらしく、嬌声を上げるようになっていった。
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

彼氏ができて関係解消ってことは、二度と
唯とはヤレないってことか？
ふざけるなー！
どこのどいつだよ、俺のモノに手を出した
やつはー！
……だが、これまでなあなあの関係を続け
てきた俺も悪いのは事実だ。
ビクッ
ズボッ

「わ、わかった。じゃあ、その……最後に俺の好きな水着を着てヤらせてくれないか？」
「えっと……でも……」
「頼むよ、な？」
「う、うん……」

「あの……着たけどこれ、恥ずかしい」
プリン

『おおおおおお……っ！」
いわゆるスリングショットという水着で、
Vストリングともいうやつだ。

『唯に着せようと買っておいたんだ。似合ってるぜ』

爽やかな笑顔を向ける俺に、彼女は複雑な表情を浮かべた。

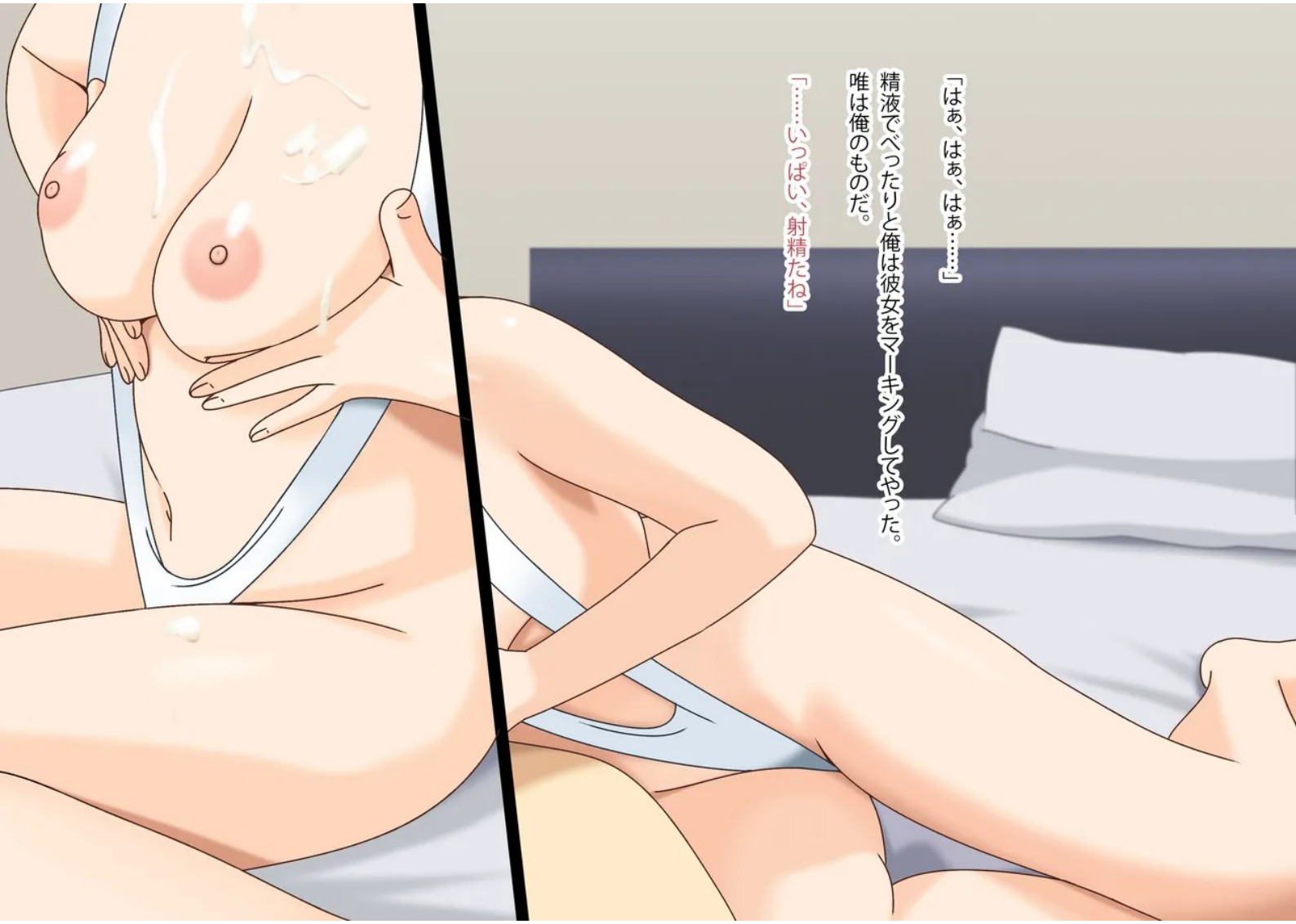
「嬉しくないし……」

「それじゃあ、まずはパイズリしてもらおうか」
「うん……」

「んっ、しょ……」
俺のモノが唯の豊かな胸に包まれる。
「唯の食い込んだ尻を見ながらパイズリされるのマジ最高だわ」
ムギュッ

「んっ、んン……」
「そうそう、もっと強めに……
あっ、ああ……きも、ちいい……」
「おちんちん……アツい」

「イキ……そう?」
「ああ、イク、そのまま強く……うっ!」
「こう、かな?」
「ああ、そう、ヤバい……
イクイク、イクぅ!」
ギュウウッ


「はぁ、はぁ、はぁ……」
精液でべったりと俺は彼女をマーキングしてやった。
唯は俺のものだ。
「……いっぱい、射精たね」

『……ふう、そろそろ挿入れるかな」

「そ、それじゃあ、ゴム準備するね」

そういって枕元のコンドームに手を伸ばす唯。

プリンと向けられた尻に、思わずムラムラっときた俺は、

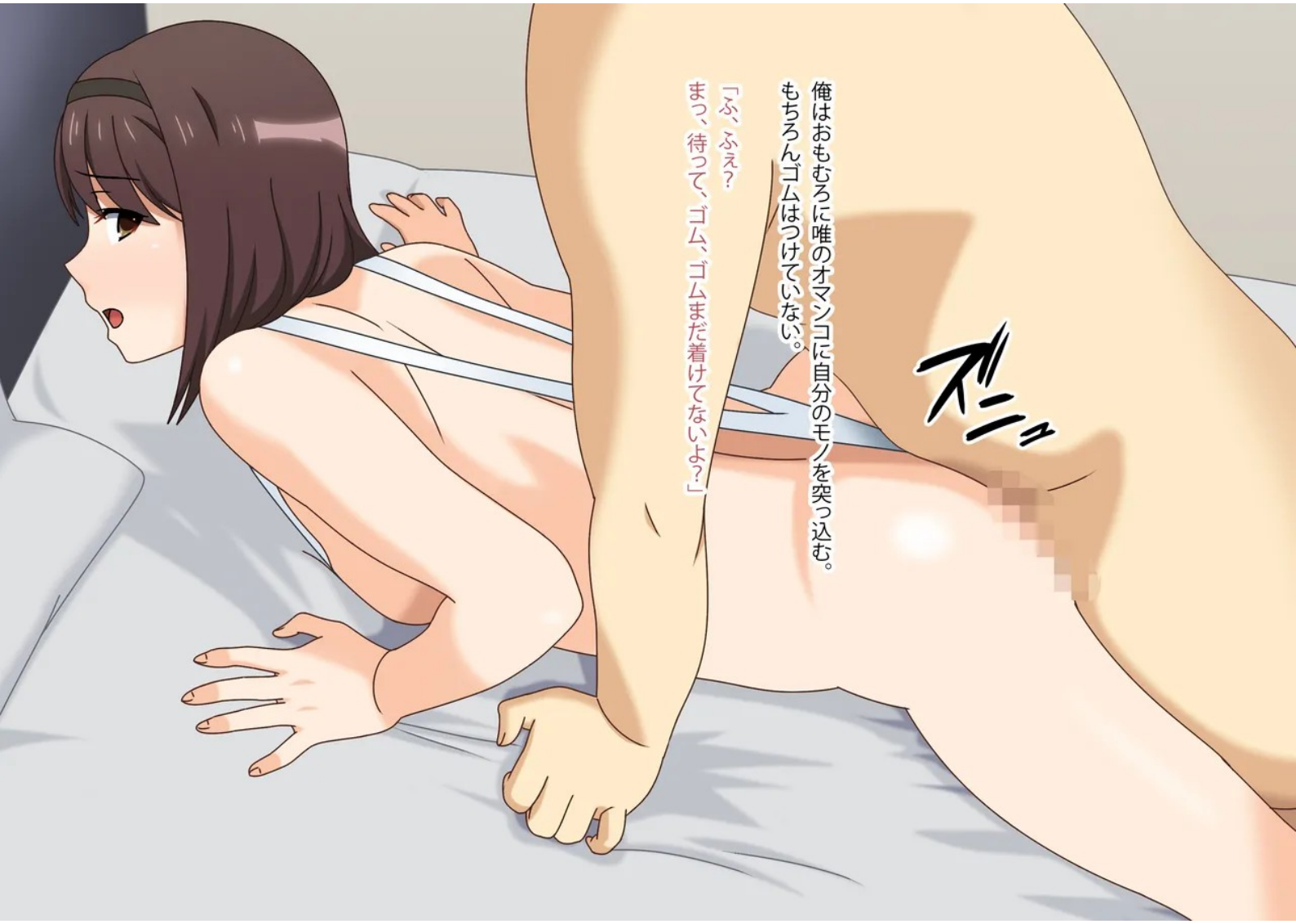
がしっとそれをつかんでいたのだった。

「こっちならゴム付けなくてもいいだろ」
そういって俺は自分のモノを唯のアナルにあてがう。
「えっ、そっちは違……」
「おら！」
ズボッ

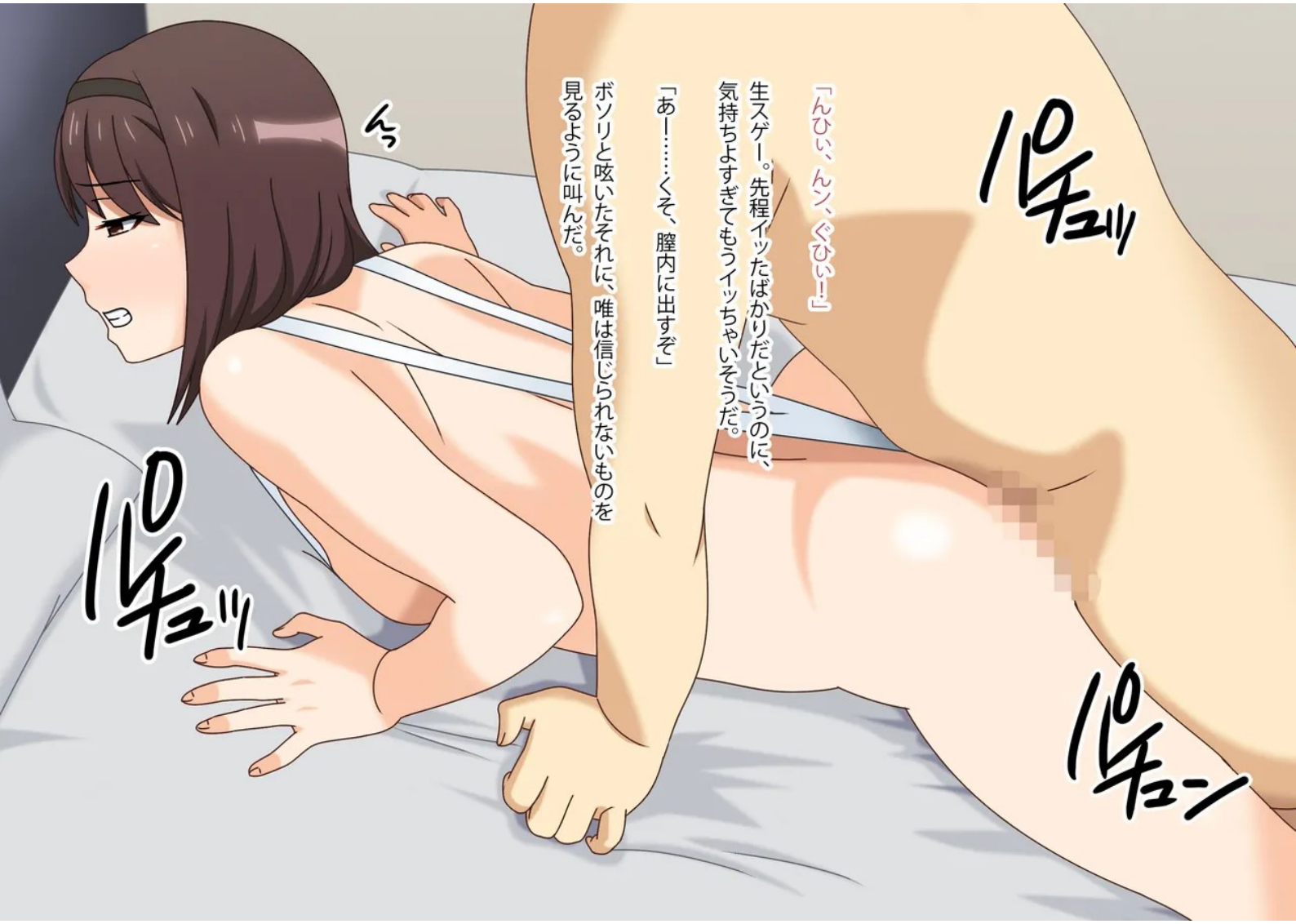
「んひぃ！」
たまにこちらもいじっていたからか、
初めてだがすんなりと挿入れることが
できた。
そのままパンパンパンと腰を打ち付ける。
ズッ
ズッ
ズッ

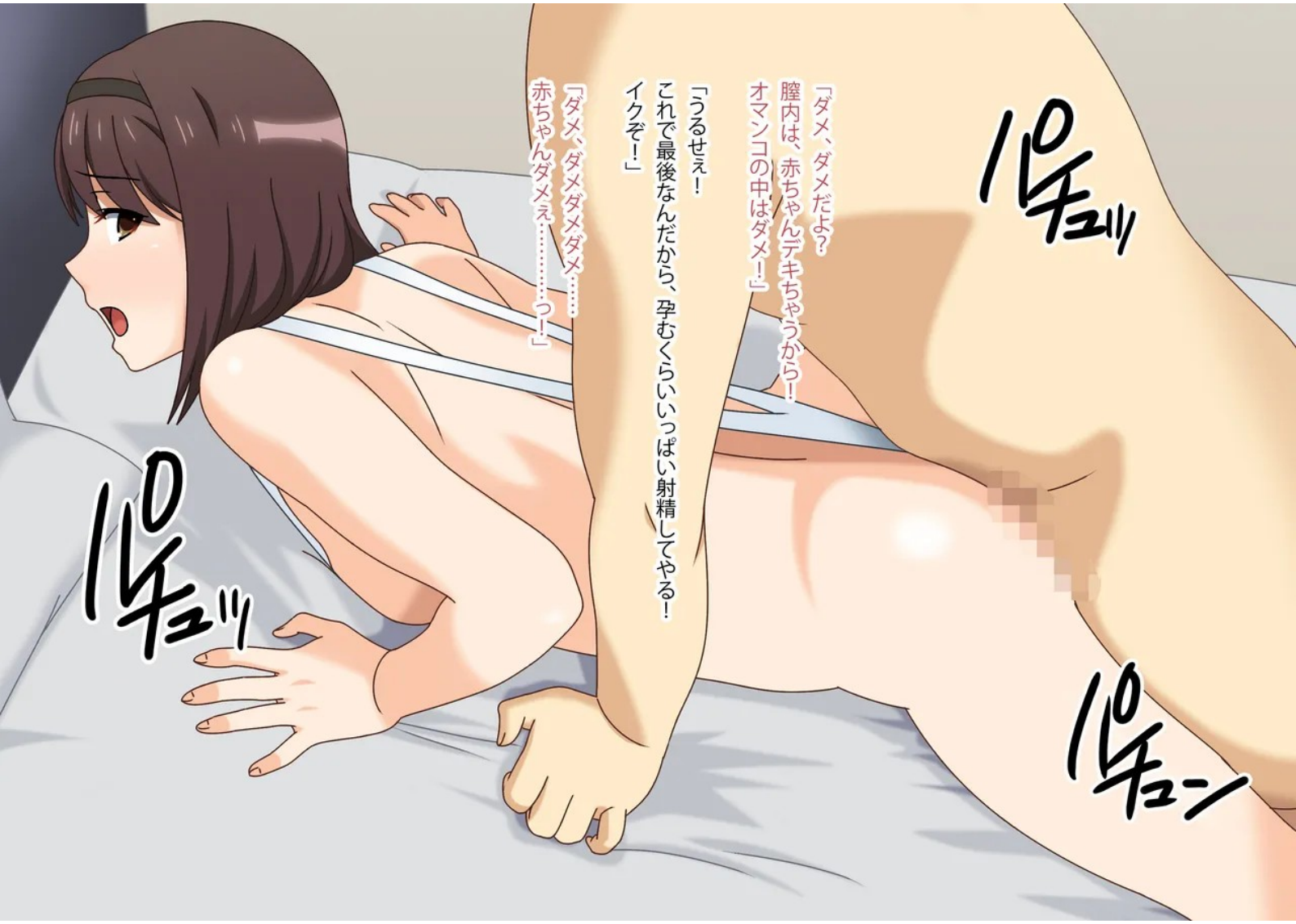
ブピュッ
「んっ、んぃ、んン……！」
「こっちの初めても俺だからな！
忘れないようにこのまま奥に射精すからな！
おら、イクぞ……くぅ！」
「んひぃ……！」

「ふぅ、ふぅ、ふぅ……」
オマンコもアナルも口も初めては俺だ。
あと残る初めては……。
「……」
脱力する唯の姿を見ながら、俺の股間は
再び熱くなっていた。
クチュ
クチュ


俺はおもむろに唯のオマンコに自分のモノを突っ込む。
もちろんゴムはつけていない。
「ふ、ふぇ？
まっ、待って、ゴム、ゴムまだ着けてないよ？」
ズニュ

「ふん、ふん、ふん、ふん……！」
一心不乱に腰を振る。
薄いゴム一枚ないだけでこんなにも気持ちいいものか。
「あっ、あン、あン……あはぁん、オマンコ突かないでぇ」
パチュッ
パチュッ
パチュン


「んひぃ、んン、ぐひぃー！」
生スゲー。先程イッたばかりだというのに、
気持ちよすぎてもうイッちゃいそうだ。
「あー……くそ、膣内に出すぞ」
ボソリと呟いたそれに、唯は信じられないものを
見るように叫んだ。
ぬっ
ぬチュッ
ぬチュッ
ぬチュン


「ダメ、ダメだよ？
膣内は、赤ちゃんデキちゃうから！
オマンコの中はダメ！」
「うるせぇ！
これで最後なんだから、孕むくらいいっぱい射精してやる！
イクぞ！」
「ダメ、ダメダメダメ……
赤ちゃんダメぇ……っ！」
ぱちゅぱちゅ
ぱちゅぱちゅ
ぱちゅん

ドクン
「うっ、くぅ！」
ドピュドピュドピュッと密着して種付けする。
初めてのとき以上に気持ちよかった。
「あっ……ああ……」
んぐ

「はぁ、はぁ、はぁ……」
倒れ込んだ唯の水着を脱がすと、
再び俺は挿入した。
「まだだ、まだまだ……っ！」
ズッ
ズプッ
ズプッ

「んっ、んン、んんん……っ！」
「おらおらおらおら……っ！」
再び下半身がアツくなる。
ズッ
ズプ
ズプ

「イクぞ、孕め！」
「あっ、あっ、ああ……あはぁ！」
「ううっ！」
ドクッ
ドクッ

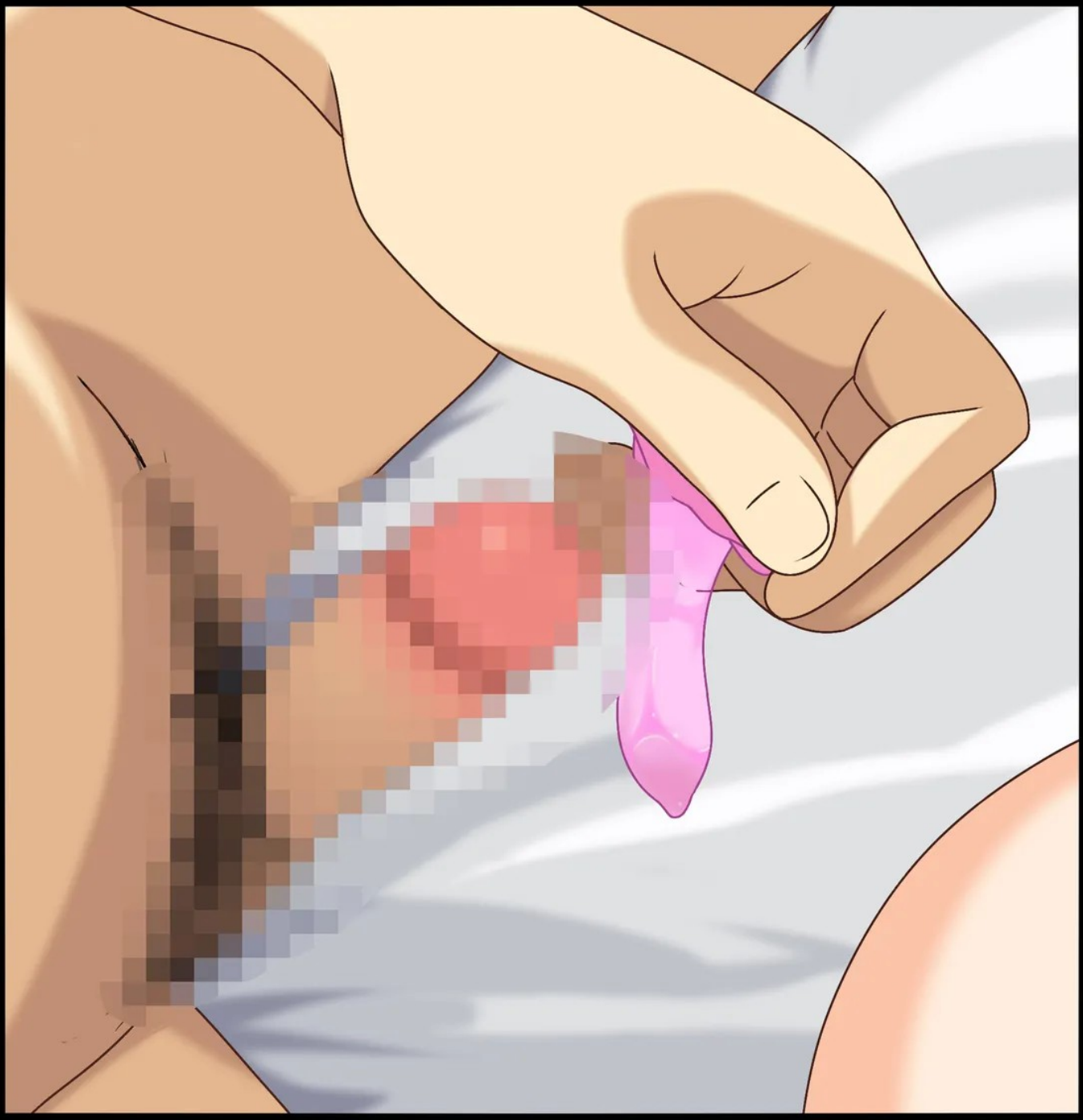
「はぁ、はぁ、はぁ……」
「あ……ああ……ごめん、なさい……」
俺か、彼氏か。
誰に謝ったかは知らないが、唯はそれきり何も話さなかった。
ぐりぐりぐりぐり…

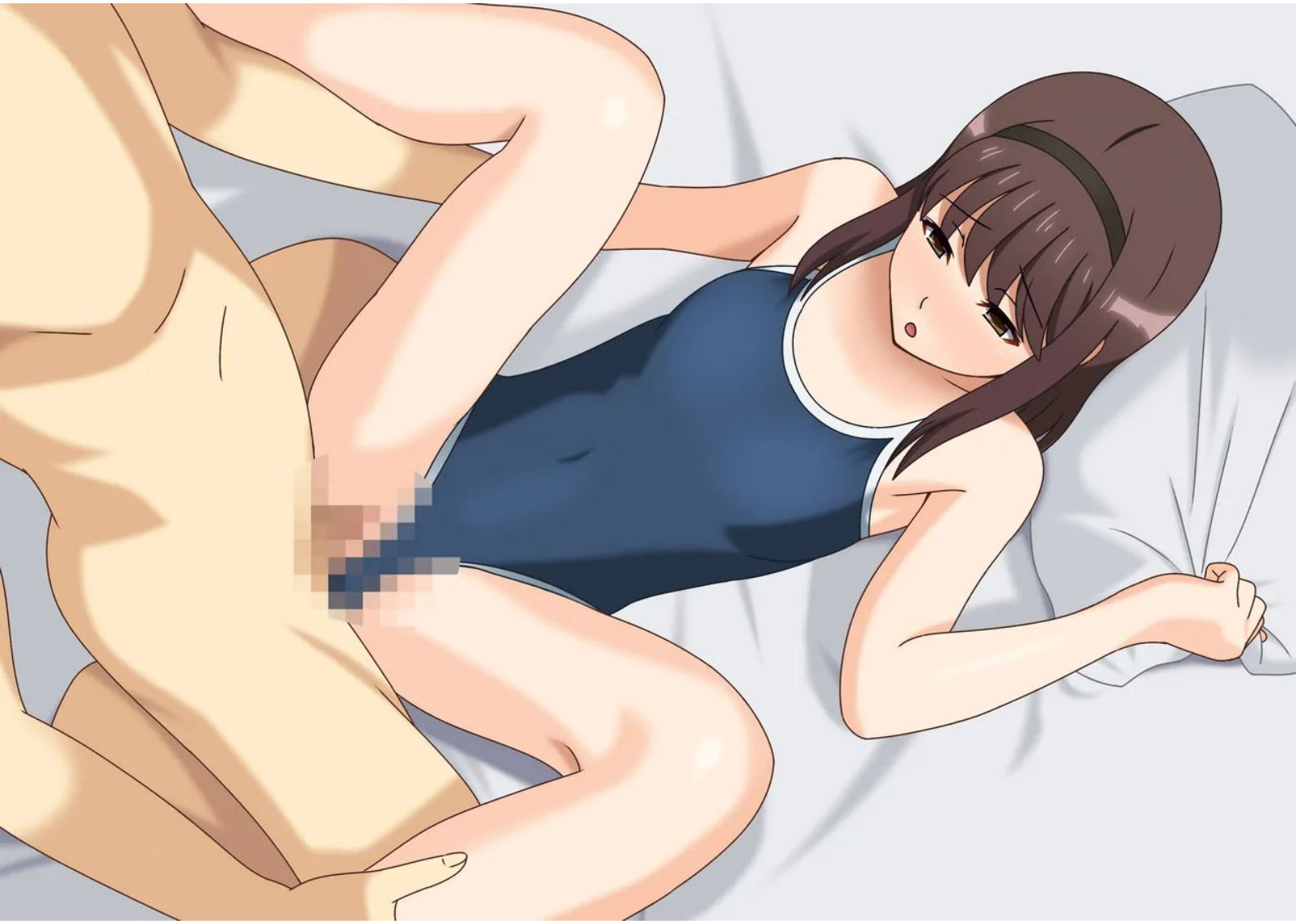
あれから、唯は件の彼氏と結婚することになった。
相手が年上だったこともあり、妊娠発覚後に
相手が結婚を申し込んできたそうだ。
そして……。

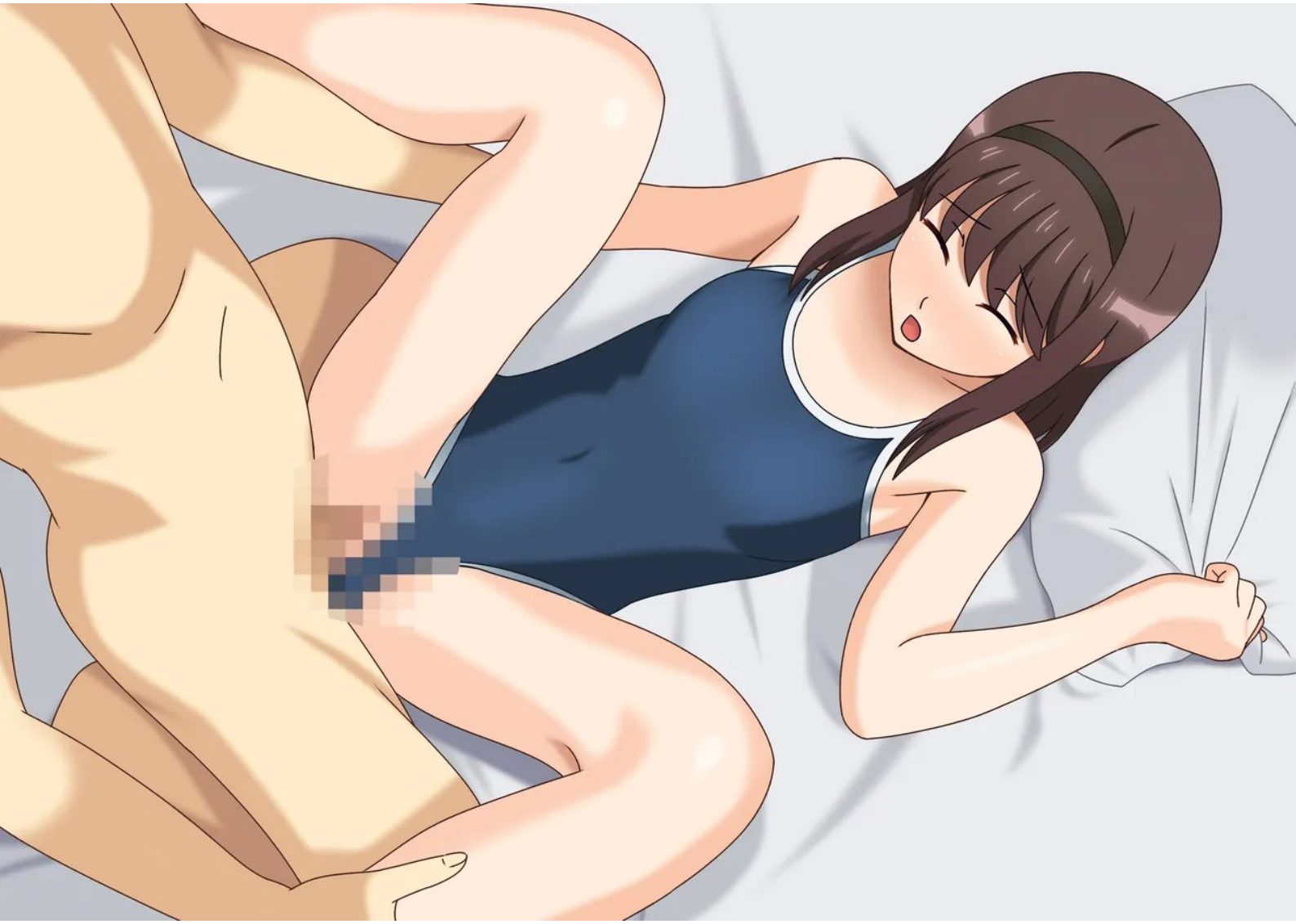
唯との関係は今でも続いている。
元々押しに弱かった彼女だ。あのときの写真を
ネタに関係を迫れば、否とはいえないらしい。
ポコン

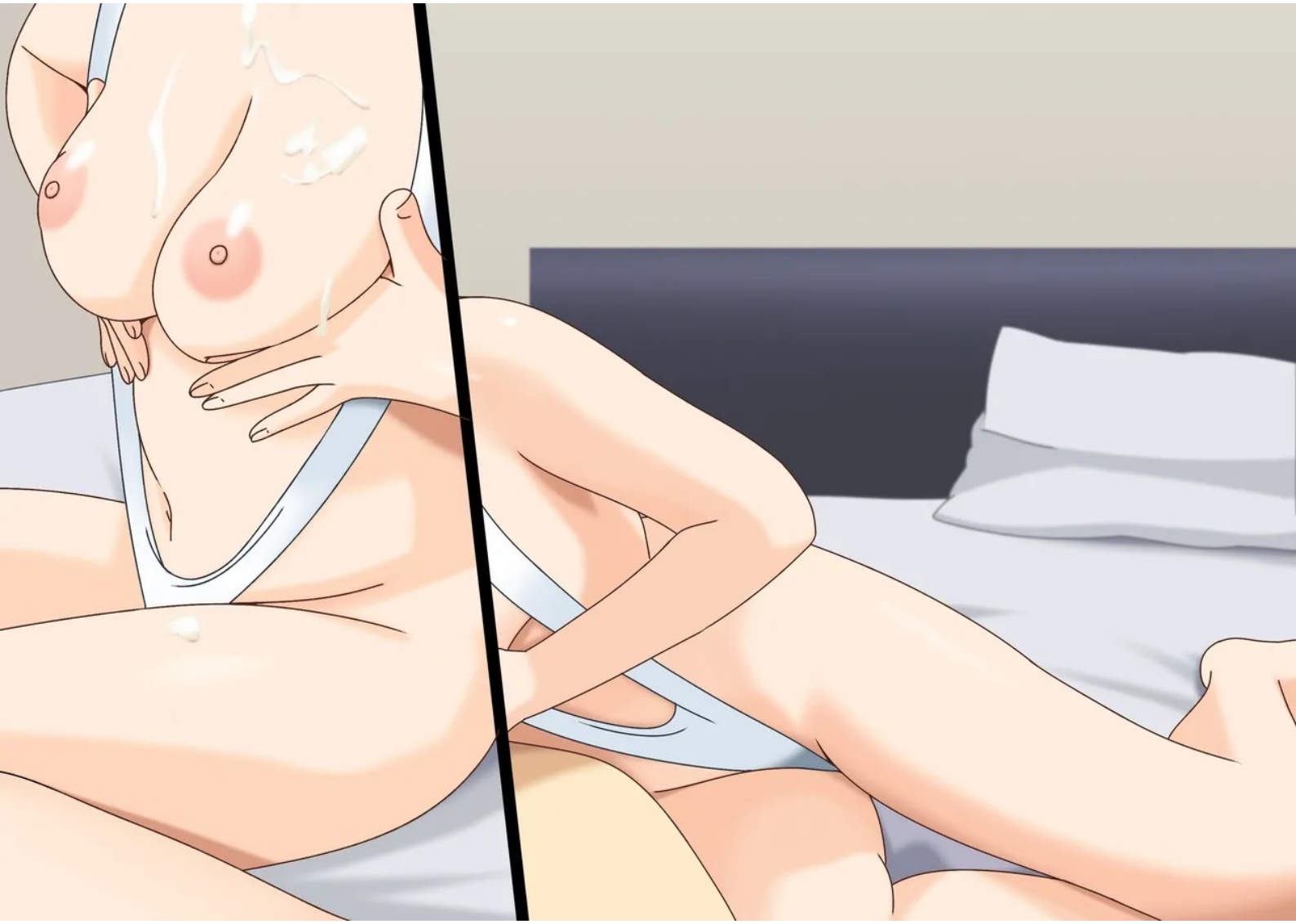
彼女と普通に付き合うことにはならなかったが、
これはこれでありだろう。
幼馴染からセックスフレンド……

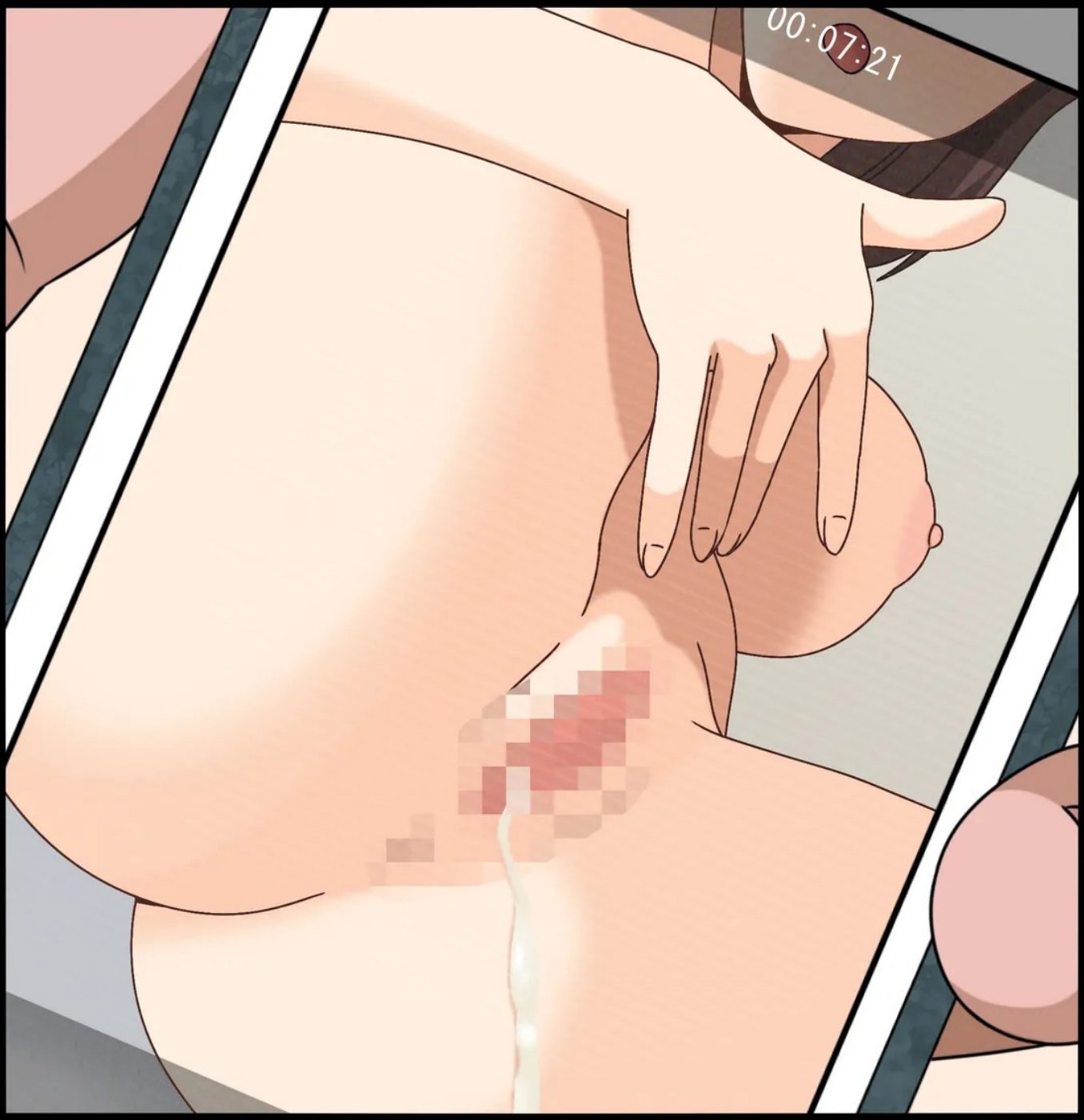
そして愛玩道具としてこれからもずっと側にいる。










00:07:21

先輩にコクハクしたいと幼馴染が相談してきたので騙してハメてやった

先輩にコクハクしたいと幼馴染が相談してきたので騙してハメてやった

「私さ、佐伯先輩に告白しようと思うんだけど」

放課後の帰り道。幼馴染である彼女、橘立夏（たちばなりつか）は唐突にそんなことを言った。

「はっ、えっ……佐伯先輩って、あの佐伯先輩？」

佐伯文孝。俺と同じサッカー部の先輩であり、プロ入りも内定しているウチの学校の有名人だ。

「お前だってサッカー部のマネージャーなんだから知ってるだろ？
佐伯先輩の人気を。お前なんか無理だって」
「むー。そうかも知れないけどさ。好きなんだからしょうがないじゃん」
冗談じゃない。お前のことを好きなのは俺の方だ。
なんとかできないものか。

「あっ、あー……佐伯先輩はさぁ、お前みたいな真面目女子より、
ビッチな女の方が好きなんだって。処女とかないわーって言ってたし」
もちろん大嘘である。だが、それで諦めてくれれば……。
「処女……そうなんだ」

しばらく黙った後、顔を赤くした立夏は小さな声で言った。
「あ、あの、さ。もしよかったら、お願いがあるんだけど……」

「懐かしー。あんたの家に来るのも久しぶりだよねー」
そう言って俺ん家の階段を上る立夏。
これから何をするか。そんなのは決まっている。
プリン

「それじゃあまずは咥えてくれよ」
部屋に入るなり服を脱ぐと、俺はいきり勃つ股間を立夏に咥えさせる。
佐伯先輩好みの女になるため、セックスを教えてくれと言ったのは、立夏の方だった。
んっ

「あむ、んっ、んン……」
初めこそ驚いた様子の立夏だったが、だんだんと慣れてきたようで、ゆっくりと舌先で俺のモノを舐る。
んちゅ

「んんっ、ちゅぶ、ずちゅちゅ……」
「うっ！」
これで初めてなのかよと言いたいくらい上手い。
だが、このまま果てるわけにはいかなかった。
「そ、それじゃあそろそろゴムをつけようか」
ちゅぶ
ずちゅるるっ

帰り道、ドラッグストアで購入したコンドームを立夏に渡すと、
それを咥えてつけるように言う。
AVで仕入れた知識だった。
「んっ、んン……これでいい？」
「ああ、今のところすっげー上手いわ」
ん～
キュッ

「えへへ。友達とエッチな動画見て勉強したからね」
女同士でもそんなことするのか。
それを聞いて、俺はなんだか興奮した。
ムラムラ…

「こ、これが立夏のおまんこ」
「えっと……変、じゃないかな？」
「全然」
めちゃくちゃ綺麗だった。
「さ、触っていいか？」
「優しく、ね？」

「すげえ……」

フェラをして興奮したのか、立夏のそこは濡れていた。

これならすぐにでも挿入できそうだ。

「い、挿入れていいか？」

「うん……」

「そ、それじゃあいくぞ」
「う、うん……」
ピッタリと閉じたそこに硬くなった俺のモノをあてがうと、一気に腰を前に突き出す。
ムニィ
ズニュ

「ぐぅ、うぅ、ぅぅ……ー」
全部挿入ったということは、処女膜を破ったのだろうが、それがわからないほど今もキツキツだった。
「やべぇ、くっそ気持ちいー」
ゆっくりするつもりが、気づけば俺は一心不乱に腰を振っていた。
ドゥ
ドゥ
ズ

「あっ、はぁ……んひぃ！」
「立夏、立夏ぁ！」
グチュグチュという音が部屋に鳴り響く。
あまりの気持ちよさに、俺はすぐさま限界を迎えるのだった。
ズプ
ズッ
ズプ

「ダメだ、気持ち良すぎる！
イク、イキそう！」
「あっ、んン、いいよ……イッて、私も
もう……んン！」
「ああ……くそ！
うっ……くぅ！」
ドクッ

「はぁ、はぁ、はぁ……」
「どうだった？」
「最初は痛くて、途中からわかんなくなった……」
二人で荒く息を吐きながら、俺たちは初体験を済ませたのだった。
ドロッ

翌日、学校にて。
「やっぱさ、もっと色々経験した方がいいと思うんだよなぁ」
「色々？」
「そう。先輩、エロい女の子が好きらしくてさ」

「本当に？」
「うんうん。だから、さ……」
「……」

クチュ
「本当に誰も来ない？」
「大丈夫だって。放課後はこっちの校舎のトイレは滅多に人来ねーから」
「でもぉ……あっ！」

パチュッ
パチュン
パチュッ
ん？
「んひぃ！」
「人来なくてもあんまり声は出すなよ？」
「やっ……しょうが、ないじゃん！」

パチュッ
パチュン
パチュッ
「んっ、んン、んふぅ！」
「あー気持ちいい。バックですんのって、また違うよなぁ」
「あんまり、激しく……しないでぇ」

ドクッ
ドクッ
「よし、イク！
立夏、イクぞ！」
「あはぁぁぁぁ……んン！」
ドクドクとちんこの先から精液が
飛び出していく。
「うっ、ふぅ……」

「はぁ、はぁ、はぁ……」
「ふう、気持ちよかった。
すっげー興奮したな」

「あっ、明日の休みはウチこいよ。両親とも出かけてるから、たっぷりヤレるぜ」
「……うん」

「やっぱり騎乗位の練習はしておかないとな。
マグロ女じゃあ先輩を喜ばすことなんてできないぜ」
「……どう？」
「そうそう、いいよ。そのまま腰を捻るように動かして」
そういいながら、俺は立夏の尻に手を伸ばす。
ズニュ
くいっ

「はひゃ！？」
「ほらほら、動きを止めない」
「だって、そんなとこ触……っっ！」
ツプリとアナルに指を入れる。

「あっ、ああ、あはぁ……んン！」
「ははっ、すげー。
ただでさえキツキツなのに、さらに締め付けてきた」
「ばっ……かぁ！」

「あっ、ダメ！
イッちゃうぅ……！」
立夏の身体がビクンと跳ねる。
どうやらこいつ、アナルが弱いようだ。
ビクン

「俺はまだイッてないから、今度は胸で……そう、挟んで」
「んっ、んン、こう？」

「あー、すっげ。なんかこう、征服感っていうの？」
「バカ……」

「あっ、あっ、あっ……あー、イク！
射精すぞ！」
「んン……！」
ギュウウッ

「はぁ、はぁ……凄い臭い」
恍惚とした表情で精液を浴びる立夏に、
俺の股間は再び熱を持つのだった。
ぜェルルッ

「ほ、本当にするの？」
「アナルぐらいビッチな女なら誰でもしてるって」
「でも……」
「先輩もアナルが好きだって言ってたしっと！」
ズボッ

「んひぃ！
やあ……これ、変だよぉ！」
「おっ、おっ、すっげ！」
前に挿入するのともまた違った感覚である。
ズプ
ズププ
ズッ

「あっ、ダメぇ……お尻で、お尻でイッちゃうぅ！」
「あー、イク。俺もイク。一緒に、一緒にイクぞ！」
「んっ、んン、んひゃあああぁ！」
ゲビュルルッ

「うっ……くぅ！」
アナルから引き抜くと、ブビッという音とともに精子が溢れ出してくる。
「ゃあ……あっ、あぁ……」
ブビッ

「んっ……先輩……」
「……ああ、くっそ！」
疲れ切って横たわる立夏に、俺は覆い被さる。
そして、ゴムを着けずに挿入した。
ズンッ

「おらおらおら！」
ズコバコと激しく腰を打ち付ける。
「んっ、んン……あっ、あっ！」
「今は俺とヤッてるんだから、俺のことだけ見ろよ！」
パン
パン
パン
パン

「おら、気持ちいいだろ？
どこが気持ちいいか言ってみろ」
「あっ、あっ、おまんこぉ、おまんこ気持ちいいのぉ♡」
「いいぞ、俺のちんぽ好きか？」
「しゅきぃ、おちんぽだいしゅきぃ♡」
パン
パン
パン
パン

「よーし、それじゃあこのまま膣内に射精すからな！いいな？」
「な……か？」
「そうだ、イクぞ……ぐぅ！」
「あっ、はぁ♡おまんこの中、熱いのがビュルビュル出てるぅ♡」
ブピュッ
ビュビュッ

「はぁ、はぁ、はぁ……」
「ほら、両手で持って」
どさくさに紛れて中出しした俺は、立夏に足を広げるよう要求する。
ハァ♡
ハァ♡
レロッ

「んっ……」
立夏が軽く息むと、前と後ろの両方の穴から俺の注いだ精子が溢れ出す。
「これを見れば、佐伯先輩もきっと立夏のこと気に入るぜ」
そう言って俺はスマホを取り出した。
ブリュ
リュ…。

「えへへ……」

「よーし、よく撮れてるぞ」

この動画さえみせれば、佐伯先輩も立夏と付き合おうなんて思わないだろう。

そう考えて、俺は暗い笑みを浮かべるのだった。

その後立夏は佐伯先輩に告白し、結果二人は付き合うことに。
動画を見せなかったのかって？

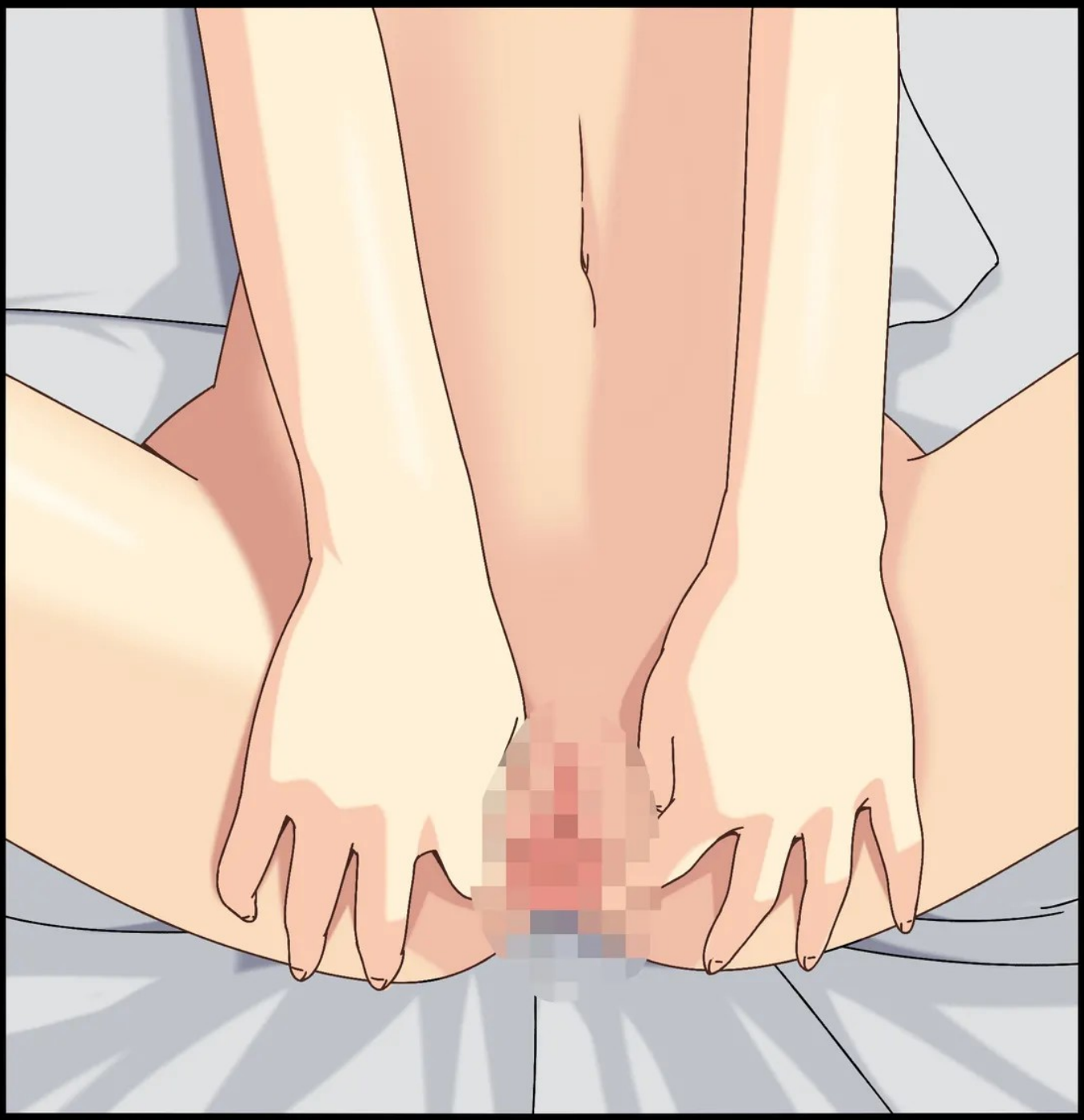
もちろん見せたさ。
ただ、俺にとって計算外だったのは、
佐伯先輩が寝取られ好きだったと言うことだ。
パチュッ
パチュッ
パチュン

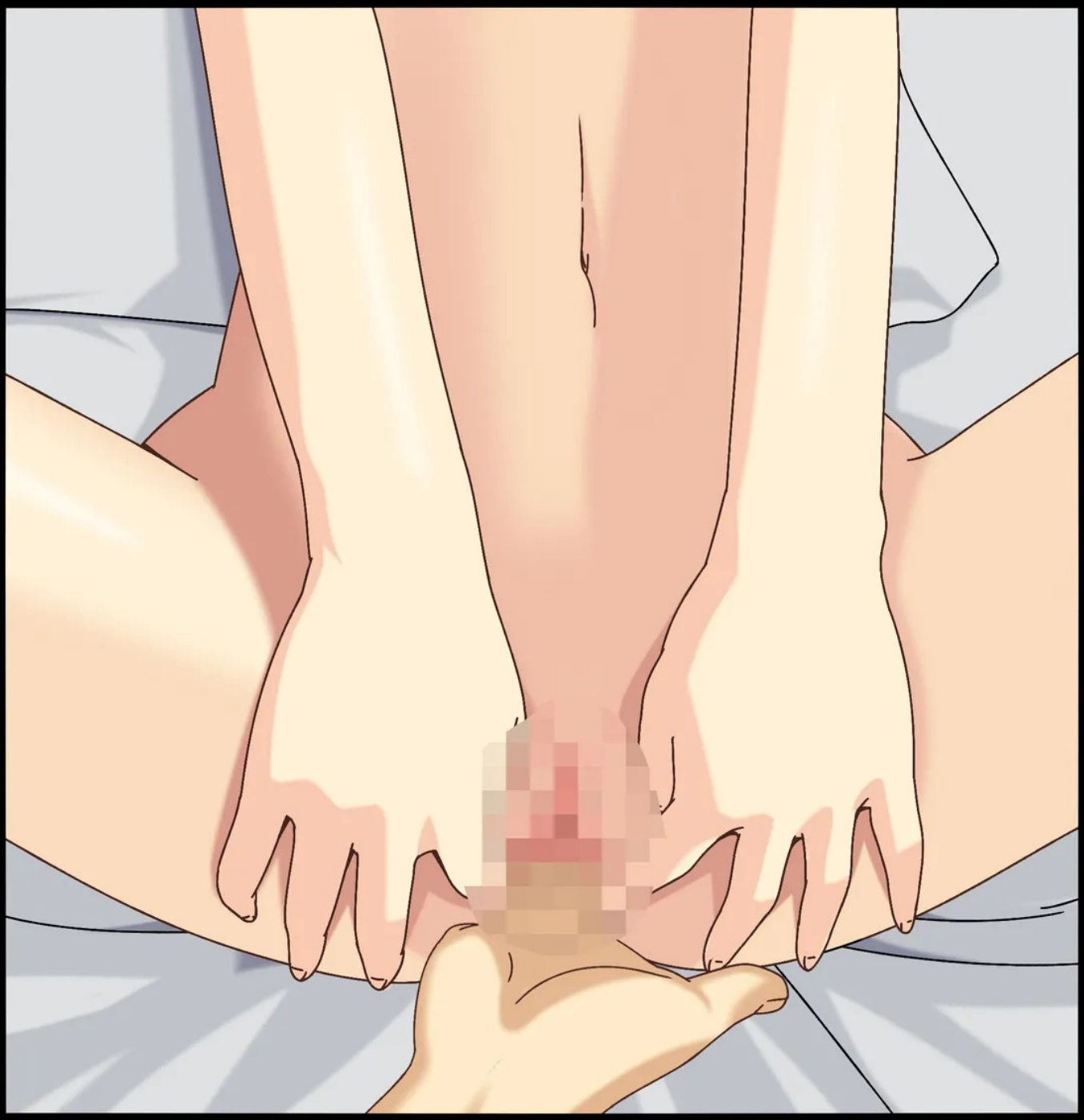
二人はあれから数年後結婚し、
見てわかるようにお腹には二人の子供までいる。

それでも定期的に俺と立夏が関係を持つ動画を
撮るよう要求されていて、俺はそれに後輩として
応えているのだった。

ちなみに佐伯先輩と立夏は今もラブラブで、
俺は涙が出るほど悔しい。
けれど立夏と関係を持つには佐伯先輩の要求に
応じるしかないわけで。
顔で笑って心で泣いて。俺は今、そんな日々を過ごしているのだった。
パチュッ
パチュッ
パチュン

00:07:21





00:07:21
タイムラプス
スロー
ビデオ
写真
スクエア

幼馴染でもある兄ヨメと
酔った勢いで子作りセックス
DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

幼馴染でもある兄ヨメと酔った勢いで子作りセックス

「それじゃあ、二人だけだけどカンパーイ」

彼女の名は武井清佳（さやか）。俺と同い年の幼馴染で、今は兄貴の嫁だったりする。

そして、俺にとっては初恋の相手でもある。

「……それでね、今日は尚くんが遊びに来るから早く帰ってくるって言ってたのに、急に出張が入ったから帰って来れないって。翔ちゃんったらホント間が悪いんだから！」

「まあ、兄貴も忙しいんだろ。新卒の俺なんかと違って、あっちはもう役職付いてんだから」

「わかってるけど！
最近仕事仕事で全然構ってくれないし。それに夜だって……」
夜。その言葉にゴクリと喉が鳴る。

「……じゃ、じゃあ、俺が相手をしてやろうか？　その、夜のお相手というか」

酒が入っていたこともあり、ついついそんなことを口走ってしまう。

対する清佳はというと、

「……」

「あ、いや、なーんて……」

「翔ちゃんには内緒にしてくれる？」

清佳のその言葉に、頭が真っ白になりながらも、俺は激しく頷くのだった。

「なんか恥ずかしいな。昔は一緒にお風呂入ったりしたのにね」
当然、小学校低学年の頃である。
「あのときは尚くんも可愛かったのに……」
スル

「今じゃあ随分ここは凶悪になっちゃったね」

そういって、清佳が俺のモノを握る。

ちなみに、彼女の裸を見た時点で俺のモノはバッキバキであった。

「あは、おつゆが漏れてる。早く舐めて欲しいんだね」

清佳の吐息があたる度に、ビクンビクンと股間が脈打ち我慢汁が溢れてしまっていた。

「清佳、本当に……」
いいのかと言う前に、パクンと彼女は俺のモノを咥えた。
んっ
はむっ

ちゅぷ!
ちゅるるっ
「んっ、んン……」
口腔内の温かさを感じ、思わず腰が抜けそうになる。
「くはぁ……!」

「はむ、んちゅ、ぢゅるる、ぢゅっぱ……」
「あっ、あっ、ああ……」
気持ち良すぎる。
加えて下品な音を立てながら一生懸命しゃぶるその姿に、
心臓がキュッと締め付けられる思いがした。
んぐぐッ
んちゅ

「やばい、清佳、出る！
うっ、うう……」
「ずちゅ、んちゅうう……！」
「うっ、くはぁ！」
俺は彼女の口腔内に、思いっきり射精した。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「んっ……はぁ……。ふふっ、いっぱい射精たね」

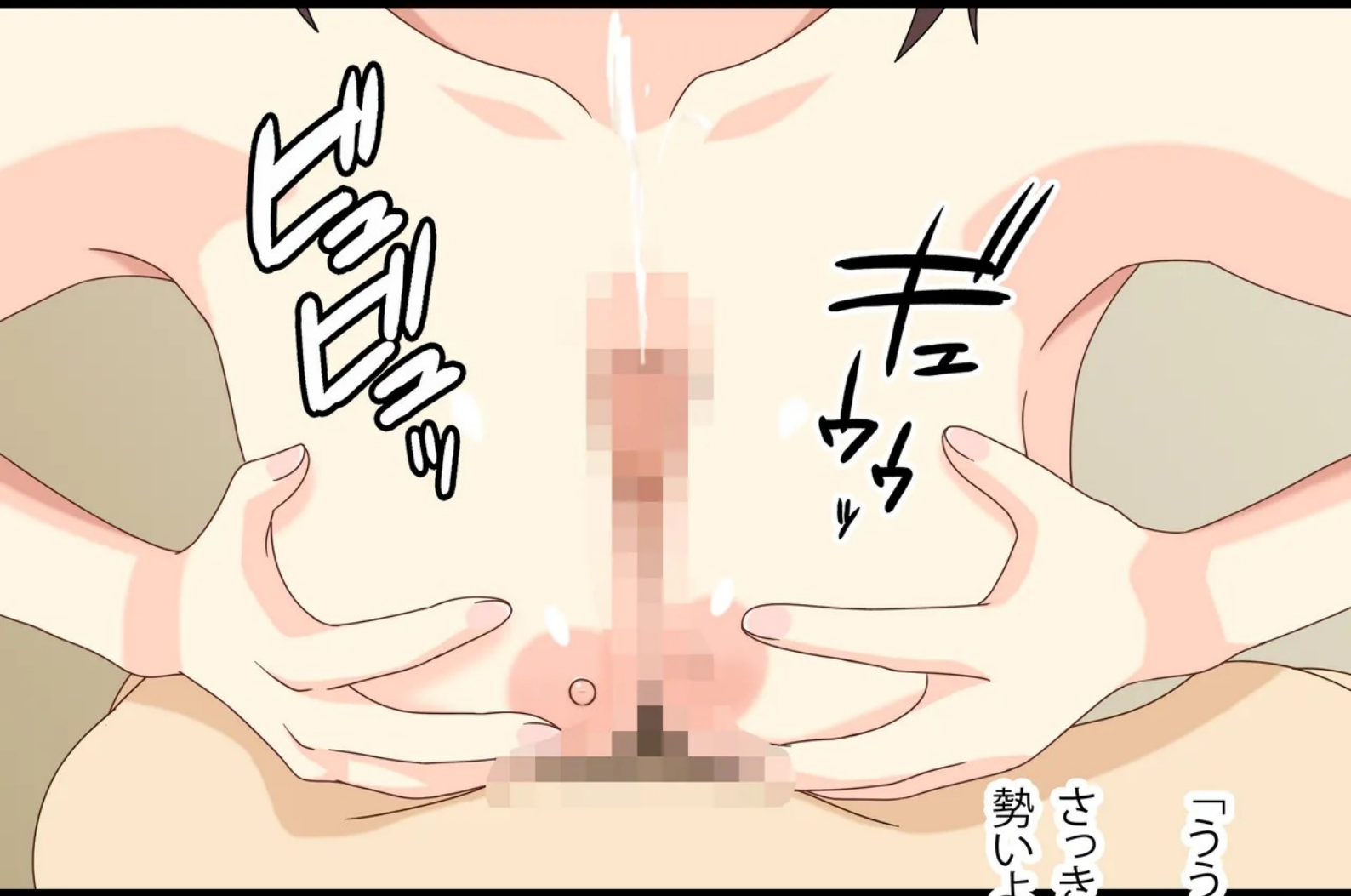
精子を口から出し、笑う彼女。

そんな彼女の姿を見て、俺はもう止まることができなかった、

「まだまだできるよね？今大きくするから」
場所をベッドに移すと、清佳はそういって
その大きな胸で俺のモノを挟んだ。
ムニィ

「んっ、しょ。んっ……しょ」
兄貴は清佳にいつもこんなことをさせているんだろうか。
悔しいと思いつつも、俺のモノは再び元気を取り戻す。

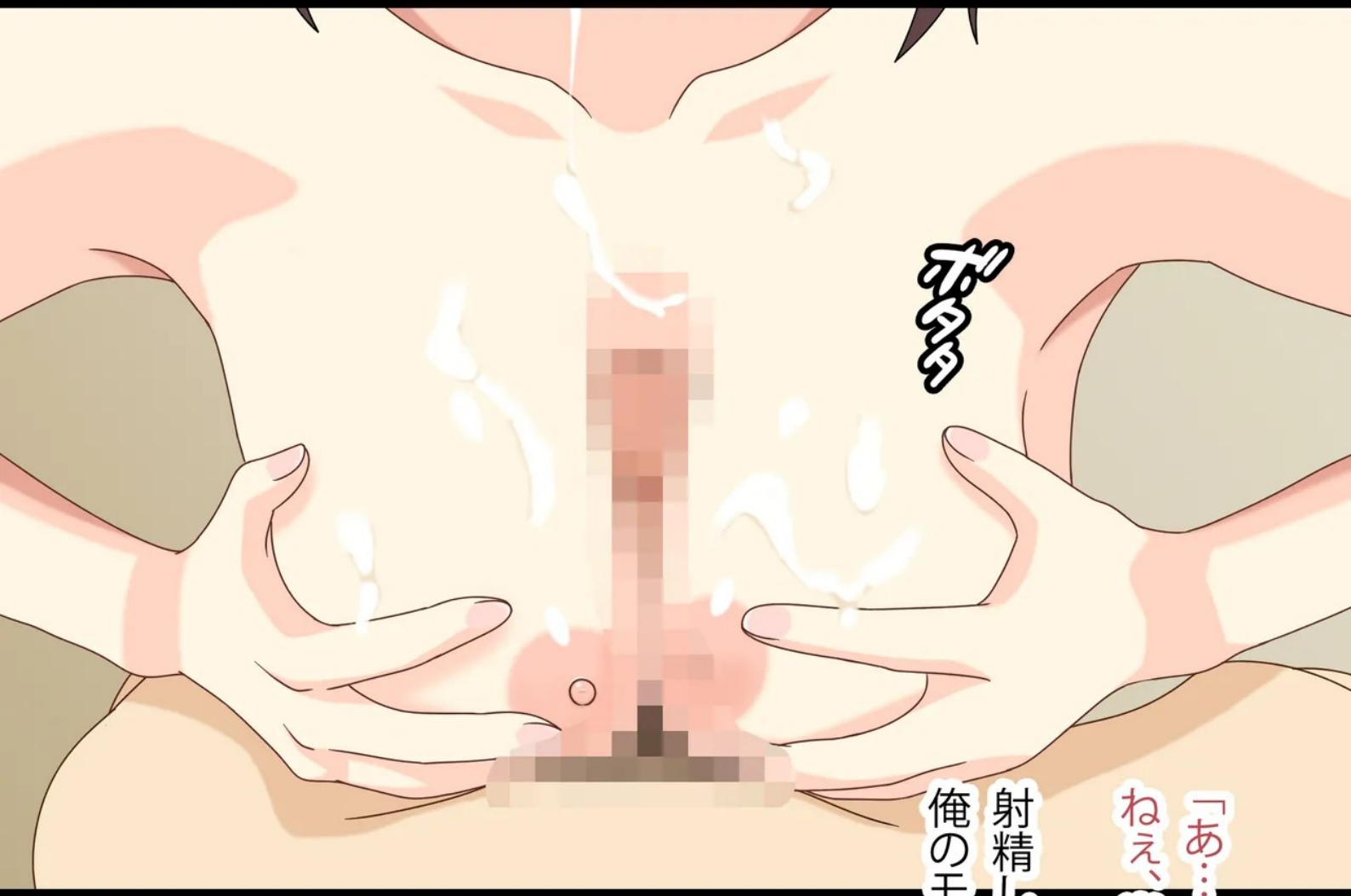
「あは、おちんちんビクビクッてしてきた。
また射精そうなの？いいよ。いっぱい射精して♡」
そういって彼女はおっぱいをギュッと締め付ける。



「ううっ、くはぁ！」

さっき射精したばかりだというのに、

勢いよく精子が飛び出してくる。



「あ……んン、あつぅい♡
ねぇ、尚くん、私ももう我慢できないかも」
射精した直後にも関わらず、
俺のモノはガチガチに大きいままだった。

「あは、尚くんの挿入ってくる……♡」
ゆっくりと分け入っていくそこは、ぬるりと既に濡れていて、
今まで感じたことのない快感を俺のモノに伝えてきた。
「あっ、奥まで挿入った♡」
「清佳、動くぞ」
メリマッ

「んっ、んン、気持ちいい……」
気持ちいいのは俺の方だ。これが夢にまでみた清佳のおまんこ。
「ヤバい、気持ち良すぎてすぐイッてしまいそうだ」
「あはぁ、おちんちん、おちんちん気持ちいいよぉ♡」

ダメだ。全然我慢できそうにない。
「ごめん、清佳！　俺もう……！」
「ダメぇ、抜かないでぇ！」
そういって清佳は俺の腰に足を絡めてくる。
「えっ、ちょ……うううっ！」

「はぁ、はぁ……」
「よかったのか、その……膣内に……」
「デキても翔ちゃんと兄弟なんだからバレないよ。血液型も一緒だし」
「いや、そういうことじゃあ……」
「嘘嘘。今日は大丈夫な日だから」
そういって清佳は笑った。
それにしても、まさか清佳とこんな形でセックスすることになるとは。
ドクッ
ドクッ

昔はよく妄想していたものだ。
とはいっても、俺が清佳を意識し出した頃にはもう、
彼女は俺の兄貴と付き合っていた。

彼女の笑顔は俺の兄貴に向けられており、
俺はそんな彼女を遠くから見ることしかできなくて。

表面上は仲の良い兄弟だったが、成績優秀でスポーツ万能な
兄貴に比べ、俺は全てが平均以下のできそこない。
親に期待をかけられたこともなく、その上俺の好きな娘を奪った
兄貴を俺は内心では恨んでいた。

友達との約束がなくなり、たまたま予定より早く家に帰ったある日。
兄貴の部屋で行為に耽る二人の姿を覗き見たことがある。

ギシギシと揺れるベッドに、甘ったるい声。
そこには、俺の見たことのない清佳の姿があった。
ぱちュッ
ぱちュッ
ぱちュン

そのあとも何度か予定を早く切り上げては、
こっそり覗き見て自分で慰めていた。
何度か彼女を作るも、どうしても清佳と比べて
しまい、長く続くことはなかった。
ボタタ

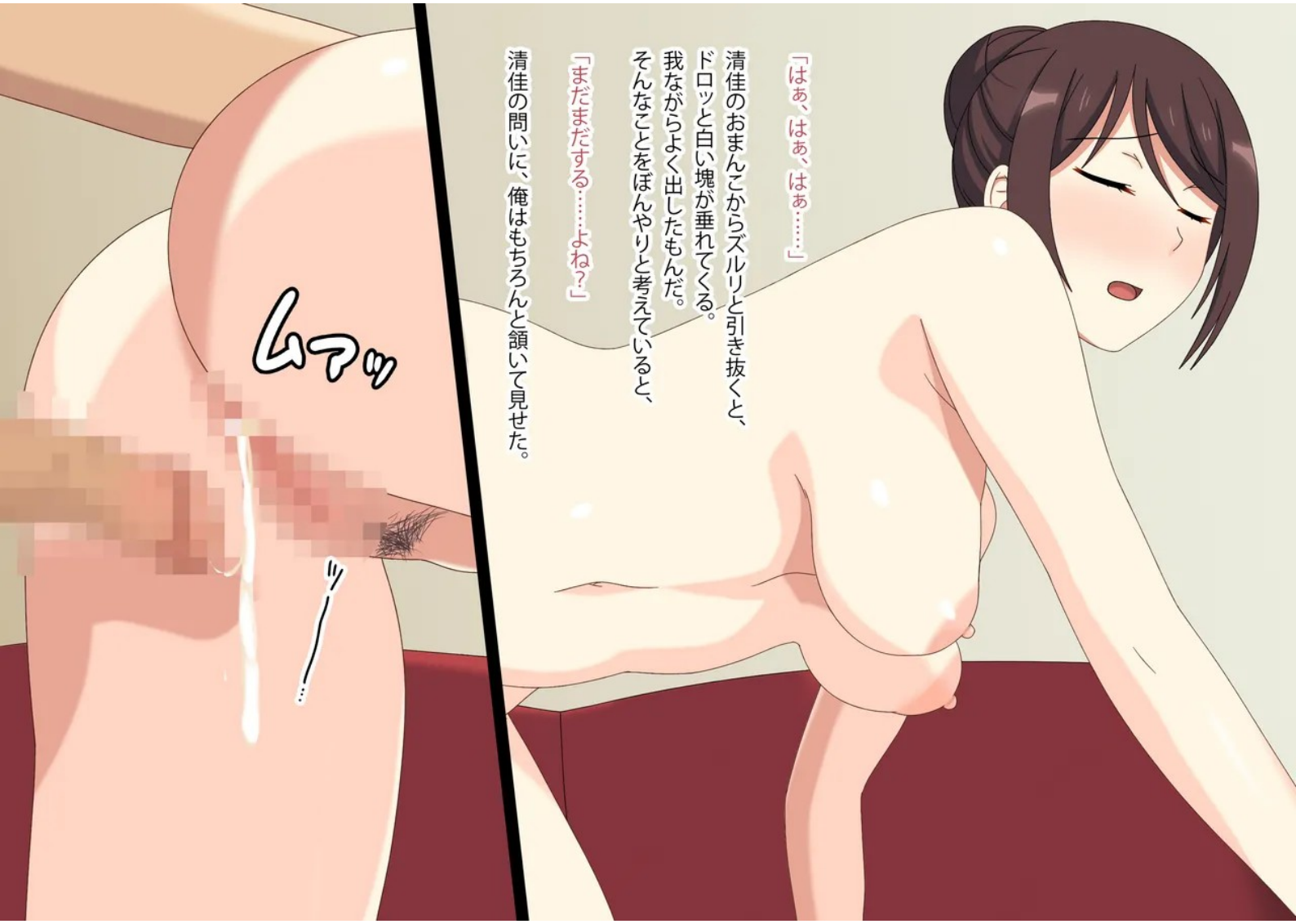
プル～
「……実は翔ちゃん会社の娘と浮気しててね。
多分今日もそっちに行ってるんだよね」
「そんな……」
「だからその意趣返し的な。尚くんには迷惑かけないから」
清佳はそういって寂しそうに笑った。

「清佳！」
「尚くん！？」
「兄貴でなく俺が清佳の旦那だったら、
お前にそんな顔させないのに！」
「それって……」
ズボッ

「俺……俺ずっとお前のことが好きだったんだ！」
「あっ、ダメ、あはぁ！」
一心不乱に俺は清佳を後ろから突きまくる。
パン
パン
パン
パン

「兄貴と離婚して俺の嫁になってくれ！」
「あっ、んン……なるぅ、尚くんのお嫁さんになるぅ……！」
その言葉に、俺は一際興奮した。
「よし、イクぞ！　種付けしてやる！
俺の子を孕めぇ！」
パン
パン
パン
パン

「あはぁ……おまんこの奥にビュルビュル射精てるぅ♡
尚くんの赤ちゃん妊娠するぅ♡」
「うっ、くぅ……！」
最後の一滴まで絞り出すつもりで射精した。


「はぁ、はぁ、はぁ……」
清佳のおまんこからズルリと引き抜くと、
ドロッと白い塊が垂れてくる。
我ながらよく出したもんだ。
そんなことをぼんやりと考えていると、
「まだまだする……よね？」
清佳の問いに、俺はもちろんと頷いて見せた。
ムアッ
ッ！

「処女はあげられないけど、こっちの初めては尚くんにあげるね？」
そういって清佳は俺のモノを自らのアナルへとあてがう。
「いっぱい気持ちよくなってね♡」
ズニュ

「んっ、んン、挿入ったぁ」
なんだこれ。清佳のおまんこはもちろん気持ちよかったが、こちらはまた違うというか、まるで違う生き物に挿入しているかのような気持ち良さがある。
何より、清佳の初めてを貰ったことに俺は興奮していた。
ズプ
ズッ
ズププ

「うっ、くぅ、気持ち……いい！」
「よか……たぁ、私も、すっごく気持ちいい……♡」
清佳がそうして俺の上で腰を振る。
その扇情的な光景に、俺は再び限界を迎えた。
ズプ
ズププ
ズッ

「あー、イク！」
「いいよ、きて。いっぱいお尻の穴に尚くんの精子注いで？前も後ろも、尚くんでいっぱいにしてえ♡」
「ううっ、くぅ！」
ズポッ

「はぁ、はぁ、はぁ……」
清佳はヨタヨタと立ち上がると、俺に向けて
股間を広げて見せる。
ぱぁ

「んっ、んン……！」
息むと同時にドロリと彼女の前と後ろの穴から、俺の出したものが溢れ出してきた。

「あは、いっぱい射精したね」
このあと興奮した俺は、当然のように続けて滅茶苦茶セックスした。
ずぷっ
ぬぷ…

あれから何度射精しただろうか。
そろそろ疲れたからこれで終わりにしようと
決めたところで、清佳のスマホが鳴った。
ズプ
ズッ
ズプ

「もしもし……ああ、翔ちゃん？」
電話の相手は兄貴だったらしい。
俺の上で腰を振りながら、清佳は電話を続ける。
ズッ
ズプ
ズプ

「うん、うん……明日も泊まりなんだね？
わかった。尚くん誘って、ご飯でもイッてくる……からぁ」
「ああ、ヤバい。今イッちゃいそうだわ！」
向こうには聞こえないよう小声でそう言うと、
俺は本日何度目かの射精をむかえた。
ビクン
ガビュルルッ

「んっ、んン……」
ふぅ、さすがにもう限界だ。
「ううん、何でもない。ちょっと眠くて……。
ええ、それじゃあごめんなさい。お休み。私も愛しているわ」
愛している。その言葉に、少しだけ俺は胸が痛くなった。
ボタタ
ズル

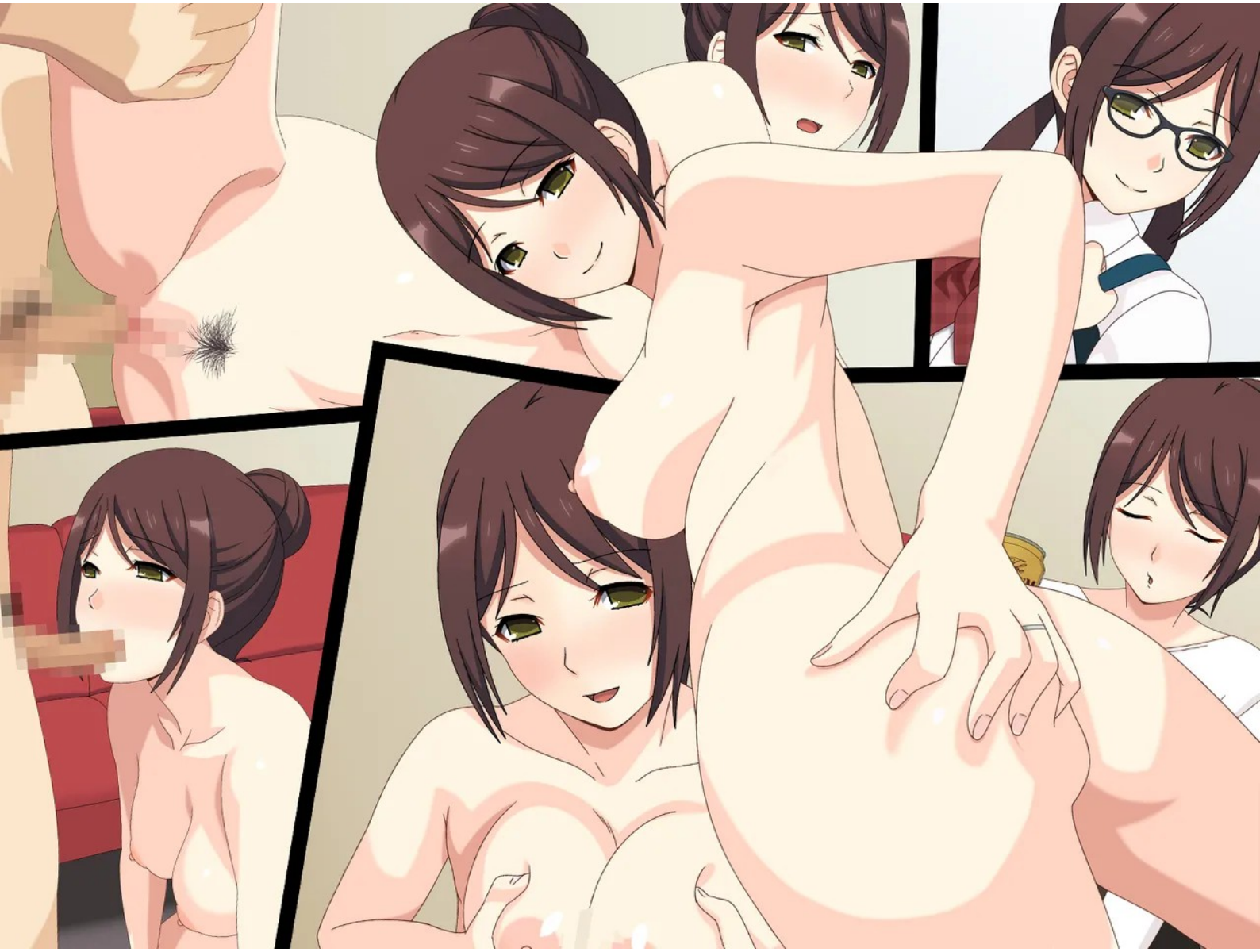
あれから。
安全日というのは嘘だったようで、清佳は俺の子供を妊娠した。
けれど、兄貴とは未だに別れていない。
ポコン

まあやっぱり身入りの面でいえば、俺と兄貴とじゃあ
雲泥の差だしな。
兄貴も清佳に子供ができてからは、浮気相手とは合わずに
真っ直ぐ家に帰ってくるようになったらしい。

それでもこうして兄貴のいない間は、俺は彼女と夫婦になることができる。

「おかえりなさい、あなた♡」

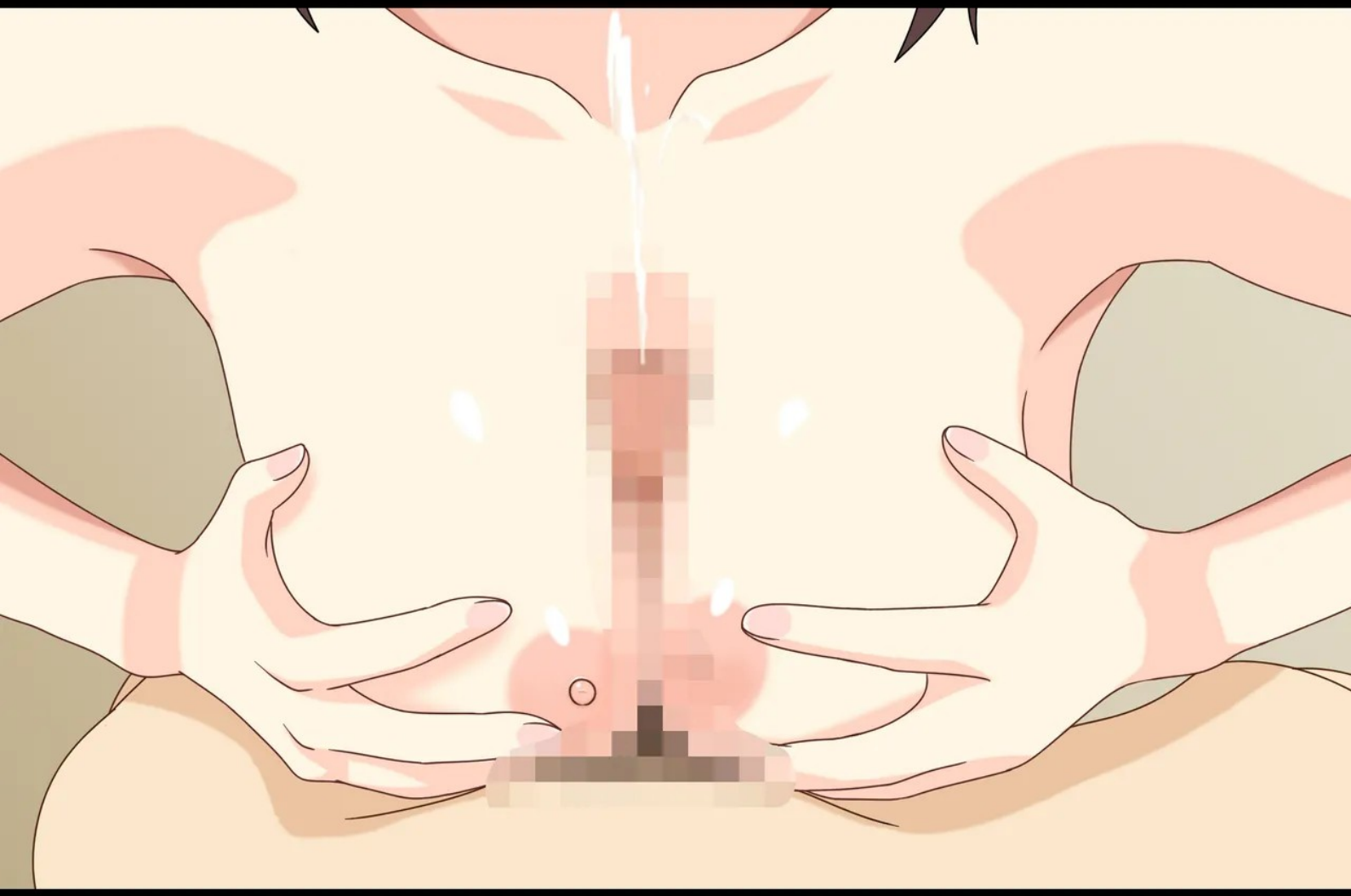
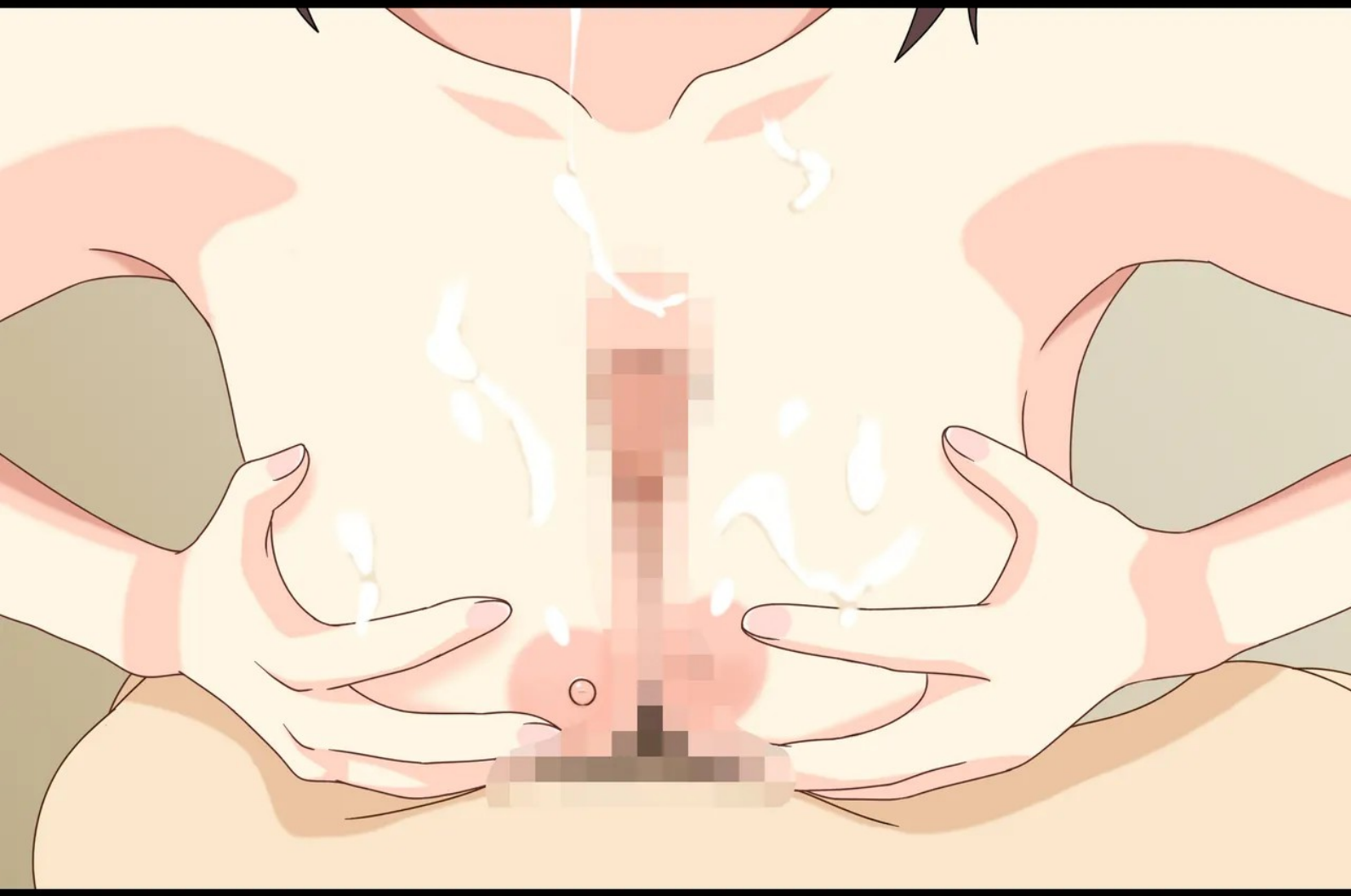
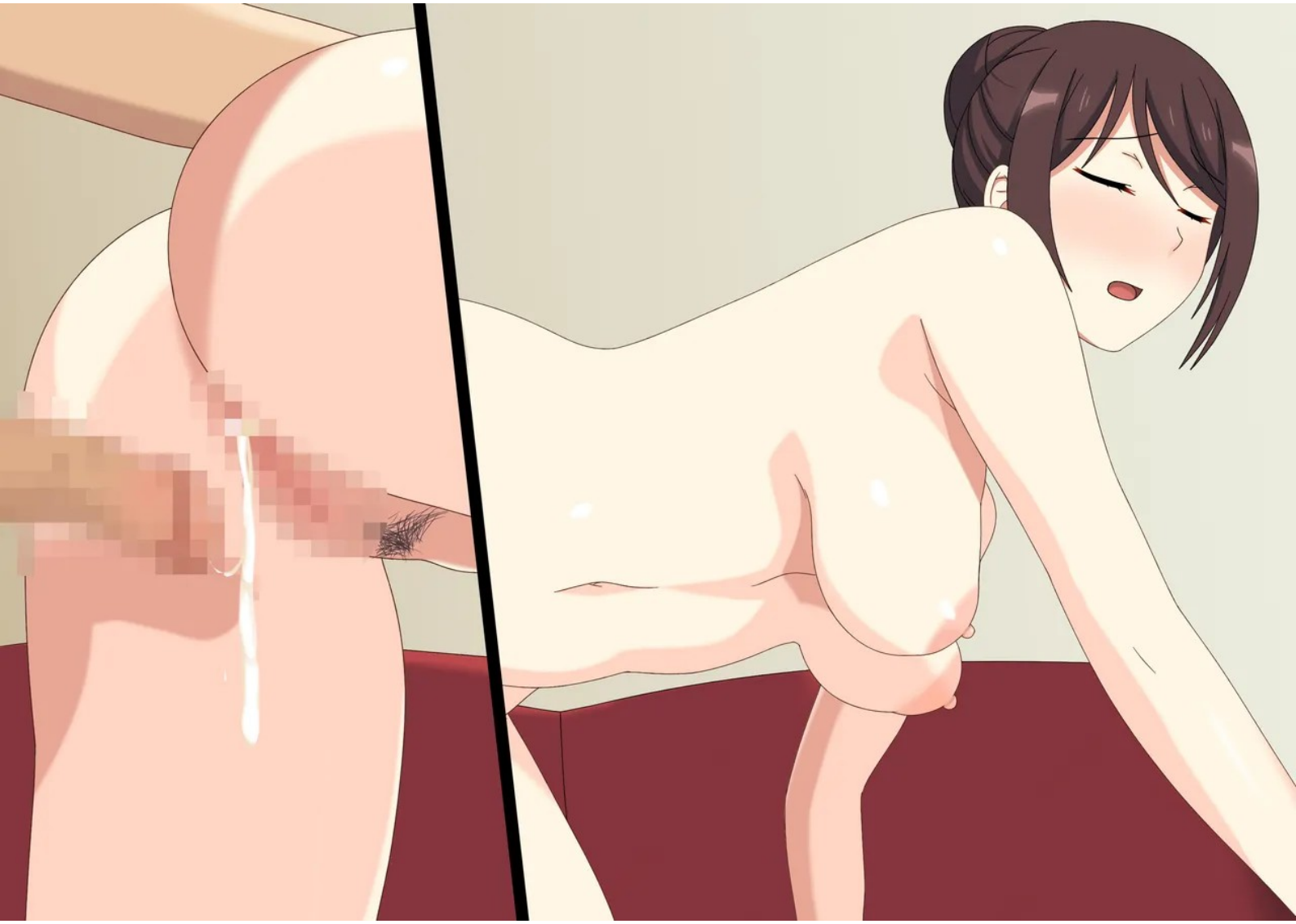
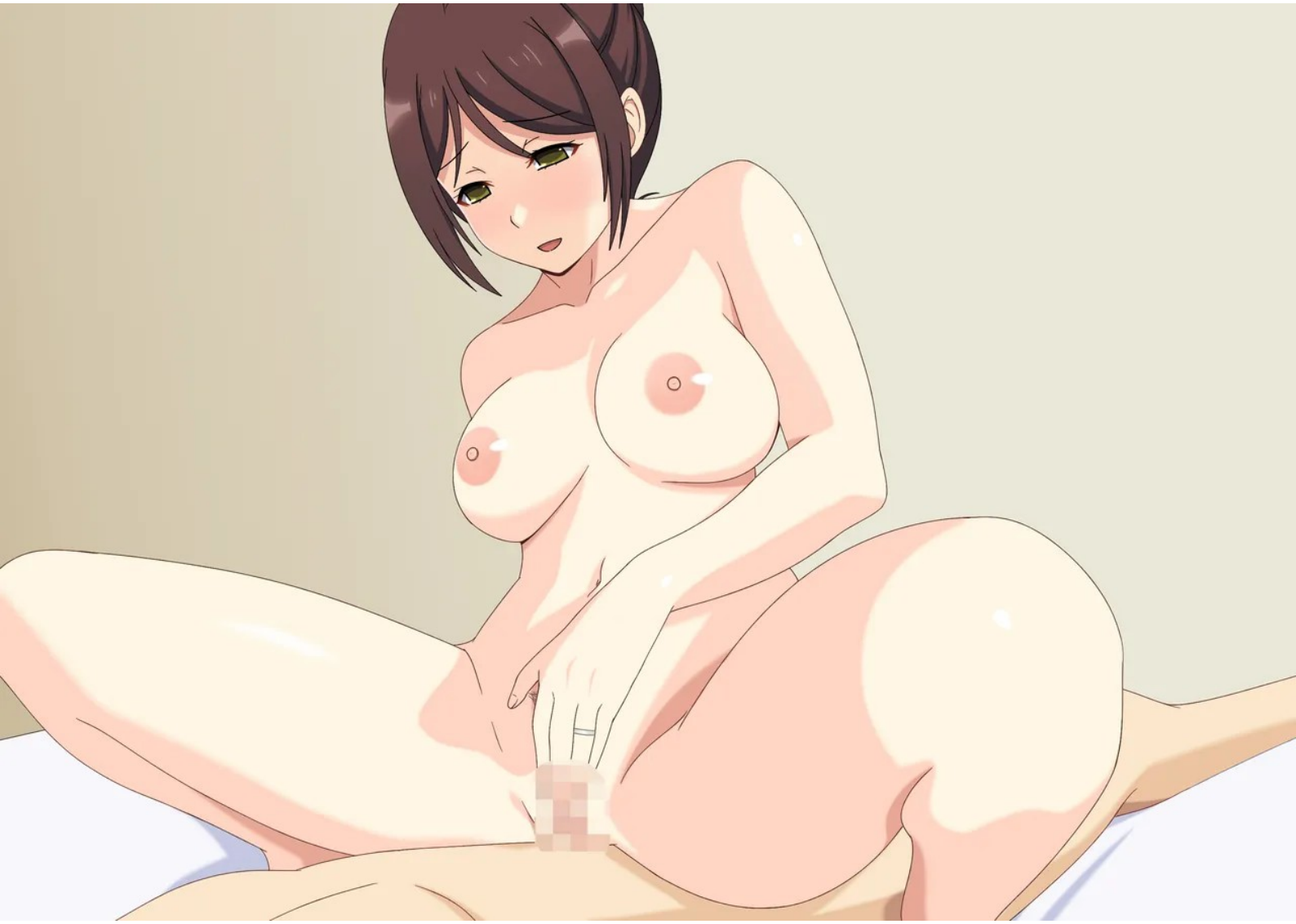
早く彼女と子供を支えることができるくらい稼げるようにならないとな。



The
PREMIUM
BEER
麦芽100% プレミアムビール(生)
お酒

The
PREMIUM
BEER
お酒

The
PREMIUM
BEER
麦芽100% プレミアムビール(生)
お酒

The
PREMIUM
BEER
麦芽100% プレミアムビール(生)
お酒

The
PREMIUM
BEER
お酒